

私は、今から10年前の平成22年から3年間、教頭として本校に勤務したことがあります。新米の教頭でしたので、赴任した4月は、本当に大変でした。当時も、詫間小学校は、500人くらいの子もたちがいて、右も左も分からない状態で、4年生～6年生の図工を担当したり、突発的な事故や事件に対応したり、先生方の質問に答えたり、書類の山を片付けたり……。朝7時には出勤し、帰りは、早くて22時頃だったと思います。実は、私は教員生活34年になりますが、平成22年の4月の中旬、教員人生で初めて、家を出ようとした時に、体が全く動かないということを一度だけ経験しました。学校に行く気はあるのに、どうしても足を動かすことができなくなってしまったのです。玄関で倒れるようにうずくまっていると、妻が、「何しよん？ さっさと学校に行きな！ しんどいのは、あなただけではない！ 子どもたちの方が、がんばっているのに！ 情けない！」と、厳しく声をかけてくれて、そのはずみで足が動き出しました。

学校に向かいながら、少し冷静になって考えてみました。そして、ある人の言葉を思い出しました。

「人は、どうなるか分からない、ずいぶん先のことばかり心配する。それは、それで大切なことだが、遠い将来のことばかりを心配して思い詰めて、今の自分をだめにしてしまっている。まずは、何も心配せず、今の君たちのままで、今日のことだけ考えたらいい。今日が終われば明日、明後日。そして、3日経てば、何か分かってくる。見えてくる。3日過ぎたら、次は3週間、そして3ヶ月。いつの間にか、『だいじょうぶ』になっているものだ。」

おそらく、私は「教頭になった」ということで、こうしなければいけない、こうでなくちゃいけないという思いが強くなり過ぎ、足が地に着いていなかったのだと思います。できないことばかりを数えて落ち込み、自分の力の無さを嘆き、これから先の不安ばかりを募らせていたのだと思います。そうだ、まずは、背伸びせず、1日をしっかり生きよう、今日できたことだけ数えよう。それを繰り返していけば、きっと未来はだいじょうぶだ。

そんなことに気づくことができた、とても貴重な体験でした。

ところで、あの時にふと思い出した言葉。誰の言葉だったのでしょうか？ それは、私が中学生の時の担任の先生の言葉だったのです。入学したばかりの頃、ホームルームで話された言葉だったと思います。当時は、何気なく聞いていて、自分の心には全く響かなかったのに、何十年も、その言葉を聞いたことさえ忘れていたのに、ふと思い出したのです。厳しい先生で、何か、いつも難しい話（説教）ばかりしていた記憶しかなかったのに……。

教育というのは、すぐに答えや成果が出るものではありません。私は、「教育とは、土地を耕し、肥やしを与えるような仕事」だと思っています。今すぐに効かなくても、いつか必ず効く。あの時の担任の先生の言葉が突然、よみがえったように。そう信じて、今、一番必要だと、大切だと考えることを、子どもたちに与えていくことだと思います。今も大切ですが、子どもたちの10年後、20年後も大切です。予測困難な時代を生きる子どもたち。いつかは、親や学校という支えが無くなっても、たくましく幸せに生きていくことができるように、学校での教育は行われなければならないと思っています。

約3ヶ月もの臨時休業日が続き、子どもたちも保護者の皆様も、もちろん教職員だって経験したことがない不安定な「今」だからこそ、ふと10年前の本校に赴任した時のことを思い出したのかもしれない。

ベビーシッターに育てられた私

今から55年以上も前の話です。私は、生まれてから幼稚園に入園するまでの間、ベビーシッターに育てられました。当時、保育所というものは、ありませんでした。また、すぐ近所に祖父母の家があったのですが、祖父母は瓦屋をしていて忙しく、私の面倒を見ることができませんでした。両親ともに勤め人であった我が家では、仕方なく近所のおばあさんに、両親が仕事に行っている間の私の世話をお願いしたということです。その頃は、ベビーシッターではなく、「子守りさん」と呼ばれていました。

私と子守りさんとの生活は、だいたい毎日同じでした。子守さんのおばあさんは、毎朝、決まって7時半頃に家にやってきます。そして、おばあさんと私で、自転車で仕事に行く母親を見送ります。その後は、居間の白黒テレビの前に移動します。私は、正座したおばあさんの足の上に座って、テレビを観ます。そうなったきっかけは、母親と離れて寂しがる私を、おばあさんが膝の上に乗せてテレビを観させたことだったそうです。私は、おばあさんのことを「動く椅子」と言っていたそうです。

お昼ご飯は、おばあさんが料理を作ってくれて、二人で食べます。おばあさんの作る料理は、昔の料理でした。今から55年以上前の「昔の料理」です。の中で、私のお気に入りには、「キャベツの塩もみ」でした。キャベツを千切りにして、塩をふってもむだけの料理ですが、日曜日に母親がまねして作っても、「おばあちゃんの味と違う」と、私は、ほとんど食べなかったそうです。

お昼ご飯が終わると、お昼寝をして、近くの公園に行ったり、家の庭で遊んだり。そして、夕方になると二人で玄関の所で、母親の帰りを待っていました。

おばあさんは、とても優しく、私を叱ったことは一度しかありませんでした。たった一度。その日は、私は朝からとても機嫌が悪くてイライラしていました。お昼ご飯を作っているおばあさんに、「遊んで！」と言って駄々をこねました。「今、料理しとるから、後でね。」と言うおばあさんに、私は腹を立て、いきなり後ろから、おばあさんを突き飛ばしてしまいました。いくら幼い私だったとはいえ、おばあさんは、予期せぬできごとにより体のバランスを崩し、火のついた鍋に倒れ掛かりそうになりました。おばあさんは、その時、私のほっぺたを叩いて叱りつけました。私は、私が悪いことも分かっていたながら、夕方まで、ご飯も食べずにずっとふてくされていました。

夕方、おばあさんは、父親と母親が帰宅するまで待って、「大切なお子様に手をあげてしまいました。申し訳ありません。」と、土間に膝と頭をついて謝っていました。

そんなことがあって、しばらくして、あのおばあさんは家に来なくなりました。そのことが原因ではなく、私が幼稚園に通い出したので子守りを頼む必要がなくなったからでした。でも、私は、そのことが、おばあさんが来なくなった理由だと思い込んでいました。

時は過ぎ、私が中学生になった頃だったと思います。あのおばあさんとの生活の記憶も薄れてきたある日のこと。母親から、あのおばあさんが、病院に入院しているというのを聞き、お見舞いに行くことになりました。

私の「動く椅子」は、病院のベッドの上で動かなくなっていました。

私は、あの時のことを謝らなくてはいけないと思っていたのですが、そのことを言い出すきっかけがなく、何も話すことができませんでした。「大きくなったなあ。立派になったなあ。」と言うおばあさんに、私は、「おばあちゃんの作った『キャベツの塩もみ』が食べたいなあ。」と一言だけ言いました。どうしても、それだけしか言うことができませんでした。おばあさんは、「うん、うん。」とうなづいていました。

それが、おばあさんとのお別れの日でした。

私は、時々、『キャベツの塩もみ』を自分で作ってみます。でも、何度作っても、あのおばあさんの味とは違います。キャベツの切り方？、塩の量？、もみ加減？……。何が違うのでしょうか？もしかしたら、料理に込める愛情なのかもしれません。もし、そうだとしたら、あのおばあさんの味には、永遠に近づくことができませんね。

習い事がクビになってしまった！—ピアノ編—

私が幼稚園に通っていた頃、四歳年上の姉がピアノを習い始めました。「お姉ちゃんがピアノを習いに行くのだから、あんたも、ついでに行きなさい。」と、いうことで、私の気持ちは全く無視され、ピアノの先生のお宅に、週1回、レッスンに通うことになりました。後で母親に聞いた話ですが、幼稚園の頃、落ち着きがなく、じっとしてられない私を心配し、ピアノを習わせたらしは落ち着くかもと考えた結果の両親の決断だったそうです。

ピアノは、真っ黒でピカピカに磨かれていて、鏡みたいに自分の姿が映りました。鍵盤をそっとたたいてみると、ポローンと音が響き、違う鍵盤をたたくと、違う音が出て、私は子どもながらに「ピアノってすごいなあ！」と感じ、ゼロだったピアノへの興味は一気に高まりました。

しかし、練習が始まると、「この鍵盤は、この指で！」とか、「左手はこうで、右手はこう！」、「楽譜を見て弾きなさい！」などの連続で、高まっていた興味は、再びゼロになってしまいました。興味がなくなると、ピアノのレッスンに行くのが嫌でたまらなくなって、当然、家での練習もサボるようになりますから、レッスンの日には、「何で練習してこないの！」と、先生に叱られます。それでも、少しはがんばって練習を試みますが、左手と右手は、どうしても違う動きができません。

そんなことが、数か月続いたある日。ピアノの先生から、とうとう「よしきさんは、ピアノを習う気が全くありませんね。もう今度から来なくていいです！」と、告げられたのです。先生は、私に喝を入れるつもりで、そうおっしゃったのだと思いますが、私は、クビになったと（実は喜んで）、その日以来レッスンに行くのをやめてしまったのです。

それから25年後、30歳になった頃。私は、何と、独学（先生に教えてもらわずに）で、ピアノの練習を始めることになるのです。そのきっかけは、また、いつか「真鍋校長の独り言」で紹介します。

今回は、習い事がクビになってしまった！—習字編—です。

習い事がクビになってしまった！—習字編—

前回は、幼稚園に通っていた頃、ピアノのレッスンをクビになってしまったというお話をしました。

ピアノのレッスンに通えなく（通わなく）なったことは、幼い私の生活には大きな影響もなく、私は、のびのびと幼稚園生活を送っていました。

皆さんには信じられない話かもしれませんが、私が幼稚園に通っていた頃は、家の人が送り迎えすることとは無く、朝は、小学生と一緒に歩いて登園し、帰りは、近所の幼稚園の子どもたちだけで帰っていたのです。私は、家が遠かったので、途中まで一緒に帰っていた友達とは別れ、たった一人で歩いて帰ることになるのです。

当時は、幼稚園児が一人で帰っていても、そんなに危険なことはありませんでした。まず、自動車がほとんど走っていませんでしたし、地域の人たちが、いたる所でそっと見守ってくださっていたのです。

私は、一人になると田んぼの中に入って虫を捕まえたり、小川の中に入ってザリガニと遊んだり…。実は、私の家の近所に住んでいた祖母が、瓦屋の仕事の合間に、時々道まで出て、私の姿を確認してくれていたようですが、当時の私は、全くそんなこととは知らず、毎日が、一人での冒険の連続だったのです。

ある日、幼稚園に行くと、園長先生と担任の先生から「佳樹さん！あなた、昨日の帰り道、道の真ん中で側転をしていたそうね。危ないから絶対にしてはいけませんよ！」と、厳しく叱られ、それから1週間連続で、「サルさんが、道で逆立ちをしてけがをした」という内容の紙芝居を聞かされたのです。

なぜ、そんなことが幼稚園の先生に知られてしまったのかというと、それは、帰り道にある八百屋さんのお婆さんが、私の帰る様子を見守ってくださっていたからなのです。私は、幼稚園で友達がしていた側転を自分もしたくて、帰りながら練習していたのです。右手を大きくあげた私を見て、その八百屋さんのお婆さんは、「幼稚園の子どもなのに、しっかり手をあげて道を渡っているわ！」と、とても感心したらしいのです。しかし、その直後、私はあげた右手を勢いよく下ろしながら逆立ちの姿勢になり、くると側転をしたのです。道の真ん中で。驚いた八百屋さんのお婆さんは、すぐに幼稚園に有線電話（受話器を取ると交換手さんが出て、相手の番号を告げるとつないでくれる電話みたいなもの）をして、このことを報告したのです。詫間小のよい子の皆さんは、ぜったいにまねをしないようにしてくださいね。

そんな落ち着きのない私が、小学校に入学して間もなく、「お姉ちゃんが習字の塾にも通うので、お前もついでに行きなさい。」と、両親から言われました。字を習うと、少しは落ち着いて勉強するのではないかと、両親も考えたのでしょう。そして、私は、4歳年上の姉と一緒に、週に1回、習字の塾に通うことになったのです。今度は、両親も考えました。長続きさせようと、「習字の塾が終わったらアイスクリームを買ってあげるから、がんばりなさい。」とききました。私は、ほぼアイスクリーム目当てで、習字の塾に通い始めたのです。

しかし、そんな気持ちで習字の塾に通っているわけですから、だんだんと、字を書くのが嫌になってきます。そうすると、同じ気持ちの友達と遊び始めてしまうのです。ある日、私は習字の墨を手に塗りつけて「手形」を作ったり、友達の上に墨を塗って、その上からポンポンと押さえて「レントゲンごっこ」をしたりして。とうとう先生に、「字は心だ！ふざける子は、もう来なくていい！」と、こっぴどく叱られてしまい、2回目のクビとなってしまったわけです。もちろん、習字の先生も本気でクビにしたわけではなく、私にもっと心を入れ替えてがんばってほしいと厳しくご指導いただいたことは、当時の私にも何となくは分かっていました。でも、何事も長続きしない私は、このことをきっかけに、習字の塾には行かなくなってしまうのです。当然、週1回のアイスクリームも無くなってしまいました…。

ピアノに続いて習字までクビになったということで、両親からも、こっぴどく叱られました。その話を聞きつけた近所に住んでいた祖母まで家にやってきて「ばあちゃんは、絶対に長生きしないかん。お姉ちゃんは、本当にいい子に育ったが、佳樹はしっかりしてないから、将来が心配でたまらん。できるだけ長生きして、何とか助けてやらないといかん。」と、ふーっと深いため息をついていた姿だけが、50年近く経った今でも忘れることができません。叱られたことより、自分はダメな人間なのだと思います。知らされたことの方が、ずっとずっと悲しかったのだと思います。

しかし、これにもこりずに、それから3年後、何と私は3回目のクビになってしまうのです。それは、「そろばん塾」です。このことは、次回の「独り言」に書かせていただきます。

習い事がクビになってしまった！—そろばん編—

前回は、ピアノに引き続き、習字の塾までクビになってしまったという話を書きました。

それから2年。小学校3年生になった私は、また習い事に通うことになるのです。それは、そろばん塾でした。「二度あることは三度ある」とも「三度目の正直」とも言います。果たして両親は、どんな思いで私をそろばん塾に通わせようとしたのでしょうか。今回は、四歳年上の姉は関係ないのです。両親は、「そろばんを習うと、計算がよくできるようになるから、今度こそ、がんばって通いなさい。」と、私だけをそろばん塾に送り出したのです。今回は、これまで以上に、両親も長続きするための対策を考えたのでしょうか。「大の仲良しのK君も、そろばん塾に通うと言っていたぞ。二人で一緒に通ったらどうだ！」と、きました。

そんなわけで、私は、新品のそろばんを買ってもらい、近所のそろばん塾に通うことになったのです。

そろばんがどんな物かは全く知らなかったのですが、塾に入るとパチパチ、シャー、カチャツという音、今まで経験したこともない、もの凄いスピードで読み上げられる数字、恐ろしい程のスピードで動く指。もっとびっくりしたのは、そろばんを使わずに、指だけ動かして見事に答えを当ててしまう「エアースろばん」をするお姉さん。とにかく、これは普通の子どもにはできないことではないと、一瞬、その場で立ちすくんでしまいました。隣にいたK君も「なあ、これは無理やな、帰ろうか？」と耳元でささやきました。私たちが見たのは、そろばん大会に向けて、必死に練習している有段者の練習風景だったのです。

その時、私とK君の姿を見つけた先生が、「はい、今日から入った子ね。あなたたちは、あっちに座りなさい。」と導いてくださり、「神」にすら見えた中学生や高校生のお姉さんの横を通り抜けて、自分たちの席らしい場所に座りました。そこで聞こえてくる音は、パチ…パチ…パチといったゆっくりしたもので、私たちは、少しほっとしました。

もちろん、最初が一番下の級の問題からやりますので、「下の玉は、『1』ですよ。3+1なら、まず、下の玉を3つ上げて、それから1つ上げると、4つ玉が上がっているでしょ？だから3+1=4ということになります。」と、小学校3年生の私たちにも、とても分かりやすいのです。あっという間に2時間が過ぎました。帰りに、「今日は、初めてだったけど、どうだった？」と先生に尋ねられ、思わず「楽しかったです。次も必ず来ます！」と答えてしまいました。

これまでのピアノと習字は数か月しか続きませんでした。このそろばんは、結構長く続けました。1年後には、そろばん4級の検定試験に合格し、大会にも出場して、何と入賞してメダルもいただきました。

しかし、順調だったのはそこまでだったのです。3級の検定試験を何度受けても不合格が続きました。10回くらい受けて、やっと合格ギリギリの得点で3級に合格できたのです。しかし、こうなりますと、だんだんとやる気が失われていき、そろばん塾には行っているものの、ぼーっと過ごしては、先生に叱られ、叱られては、ぼーっと過ごしの連続となり、とうとう、廊下に出て遊んでしまうようになりました。その遊びとは、今考えると大変なこと。何とそろばんを、ローラースケート代わりに使って遊んでしまったのです。これには、塾の先生も激怒し「もう来なくて、よろしい！」と、言われてしまったのです。とうとう、「二度あることは三度ある」という結果になってしまいました。

この3度のクビは、私にとっては苦い思い出なのですが、今、考えてみると、私に一番足りなかったことを教えてくれました。それは、「少しの壁にぶち当たると、それを超える努力をせずに、すぐにあきらめてしまうこと。そして、それは自分の問題なのに、全てを人のせいにしてしまうこと」だったのです。もちろん、それを完全に理解し、受け入れることができたのは大人（社会人）になってからなのですが。それでも、経験というものは不思議なものです。こんなに昔のことなのに、まるでその場にいるかのような感情が、今でも鮮明によみがえってきます。そして、時々、この経験が、私を叱ってくれているのです。

ちなみに、小学校5年生から習い始めた「柔道」だけは、小学校を卒業するまで、クビにならずにやり通すことができたということ。念のために（名誉回復のために）書いておきます。

2週間だけの転校生

私が、小学校の3年生か4年生の頃、私のクラスに突然、転校生がやってきました。その頃、私の学校では、転校生は非常にめずらしかったのです。それに加えて、たった2週間だけ私たちのクラスで勉強して、すぐまた転校して行くというので、とてもびっくりしたことを覚えています。

ある夏の日の朝、その女の子は、おどおどしながら（そう見えたのですが）先生に連れられて教室に入ってきました。驚くほど色が白く、小さな女の子でした。名前を言ったとは思いますが、聞き取れないくらいの声で、全く笑顔もありませんでした。私たちも、初めての転校生で、どう接したらいいのか分からないというのが本音でした。「〇〇さんは、ご両親のお仕事の都合で、この町に2週間だけいます。2週間経ったら他の県に、またお仕事に行くので、みんなと一緒に勉強できるのは2週間だけですが、みんな仲良くしてくださいね。」と、先生がおっしゃっても、私たちには、どういうことなのか理解することはできませんでした。「席は、真鍋君の隣に座ってください。それと、〇〇さんは、教科書を持ってないから、真鍋君、一緒に見せてあげてね。それと、真鍋君の班の人は、いろいろ学校のこと教えてあげてね。」と、先生は続けておっしゃいました。そういうわけで、私は、たった2週間だけの転校生と席を並べて勉強することになったのです。

〇〇さん（申し訳ないけれど名前は忘れてしまいました。）は、何もしゃべりませんでした。そして、休み時間に、外で遊ぼうと誘っても、首を横に振るだけでした。先生に言われたので、教科書だけは見せてあげましたが、何を聞いても何にも答えないので、とうとう2週間目は、私も段々つまらなくなって、私から話しかけることも全く無くなりました。

そして、あっという間に2週間が経ち、土曜日の昼前（この頃は、土曜日の午前中も、学校がありました。）、〇〇さんは、黒板の前に立ち、一言だけ「さようなら。2週間、ありがとう。」と言い、私たちの学校を去ってしまいました。

その土曜日の午後、私が帰宅すると、近所に住んでいた祖母が私の家で待っていて、

「明日、〇〇温泉で、△△劇団の最終公演（しばいや踊り）があるから、お前も連れて行ってやるぞ。」となり、私は、翌日の日曜日、ハイヤー（タクシー）に乗って近くの温泉ホテルに祖母と出かけたのです。

温泉ホテルは、とても立派で、大きなステージがある宴会場には、何百人もの人が座って料理を食べ、お酒を飲みながら、しばいや踊りが始まるのを待っていました。その中で、子どもは、私一人だったと思います。祖母は、商売人だったので、こんな時はとても気前が良く、私にオムライスとオレンジジュースを頼んでくれました。

時代劇や歌が始まりましたが、私は全くおもしろくないので、料理を食べることに集中していました。

いよいよ、フィナーレです。この劇団の一番人気の女優さんが、踊りをするのです。そのことをよく知っているお客さんたちは、「よっ、待ってました！」と大きな拍手で、その女優さんを迎えました。

ステージに上がってきた女優さんを見て、私は驚いてしまいました。オムライスに乗せたスプーンを、ポトリと落としてしまうくらいに。何と、その女優さんは、昨日まで私の席の隣に座っていた女の子だったのです。化粧をして綺麗な衣装を着ていても、私は一瞬で分かりました。

その女の子は、踊りがとても上手で、白くて細い指先や、顔の表情まで、何ともいえない大人っぽい踊りをするのです。踊りが終わると、お客さんたちは、ちり紙（ティッシュペーパーみたいな紙）に、お金を包んでくるくるっとひねって、それをステージに向けて投げました。それだけではありません。その子は、ステージを降りて、お客さんの席を回り始めます。そうすると、大きな拍手とともに、今度は、その子の手に、お札を手渡すのです。その子は「おおきに。」と、何とも言えない笑顔をお客さんに返します。

この1ステージで、何万円（今のお金にしたら何十万円？何百万円？）も稼ぐ、大人気女優さんだったのです。その子は、私の席にもやってきました。私は、恥ずかしくてずっと下を向いていました。その子は、自分から私の手を握り、「本を見せてくれて、おおきに。」と言いました。私は、返事をすることも、笑顔を返すこともできませんでした。昨日まで隣に座っていた子とは、まるで違う人でしたから。

帰りのハイヤーの中で、「あの子は、お前のクラスにいた子やろ？お芝居で全国を回っているんやなあ。土曜日の午後と日曜日は、立派な女優さんや。日焼けしたらいかんから外で遊べんらしい。すぐに転校するから、仲良くなったらお別れが悲しいから、あまり、仲良くならないようにしているらしいよ。」と、祖母から聞かされ、この2週間の出来事が、私の中で完全につながっていったのです。

ファミリーレストランでの思い出

私の娘が、3歳か4歳の頃のことですから、今から、もう20年も前の話です。

ある冬の寒い日。連休最後の夜のことでした。私と妻と娘の3人で、自動車で20分くらいの所にある、ファミリーレストランの入り口の外で立っていました。この連休は、残念ながらどこにも出かけることができなかつたので、せめて連休最後の日くらいは、外食をしようと出かけてきたのです。ところが、連休最終日とあってか、どこのお店も混んでいました。あきらめて帰ろうかと思うくらい、どこもかしこも長蛇の列ができていました。しかし、せっかく来たのだからと、私たちは決心し、できるだけ厚着をして、「お子様ランチ」のある、この店の長い列の最後に並びました。

店の外で30分位は待ったでしょうか。やっと、店の中に入ることができました。これで寒さはしのげます。でも、店の中にも、まだ数組のお客様が待っていました。そして、1時間が経った頃、それまでは、割と機嫌よくお話ししたり、しりとりをしたりしていた娘がとうとう、ぐずり始めたのです。お腹もすいてきた上に、1時間半以上も待っているのです。3、4歳の子どものことですから、無理ありません。

「お腹すいたよー。疲れたよー。もう、やだよー。」

と、娘は、今にも泣きだしそうになっていました。そこで、妻が、娘を抱きしめてくすぐったり、耳元でお歌を歌ったりして機嫌をとりました。ちょうど、その時に、一度に3組くらいのお客様が次々に席に案内され、私たちは、前から2番目（次の次）になっていました。

ところが、そこからは、ピタリと帰るお客様が無くなってしまったのです。とうとう、娘は、

「まだー？お腹すいたよー。疲れたよー。もう、やだよー。いつまで待たらいいの？」

と、前よりも、大きな声で、再びぐずり出したのです。

「次の次。もうすぐだから、もうちょっと我慢してね。」

と、言う妻や、先ほどの娘の声は、私たちの前に並んでいたお客様に聞こえていたのです。そのお客様は、私の父母と同じくらいの年齢に見えるご夫婦でした。

「あう、よろしかったら、順番を変わりましょう。お嬢ちゃんも、お腹すいているだろうし。私たちは急ぎませんから。どうぞ、遠慮なさらずに。さあ、どうぞ。」

と、振り返って私に向かって、そうおっしゃってくださったのです。「しめた！」私は、実は内心、こんな言葉をかけてくれるのではないかと、大いに期待していたのです。しかし、すぐに受け入れては、あつかましいので、一度はお断りして、もう一度、そうおっしゃってくださるなら遠慮なくそうさせていただこうと思っていたのです。すると、

「私たちにも、お嬢ちゃんくらいの孫がいますね。この連休に帰って来る予定だったのですが、孫が熱を出してしまいました。孫に会えなくてがっかりです。孫が来ないなら夕食を作るのも何だから、二人で外食でもしようと思って来ただけなのです。本当に、お先にどうぞ。さあ、どうぞ。」

と、期待通りの声がかかりました。横にいる妻も、きっと丁寧に敬礼を言って、その申し出を受け入れるに違いないと思っていました。しかし、

「本当にご親切にありがとうございます。でも、順番を守ることを教えるのも親の務めですから。」

と、妻は、きっぱりと断ってしまったのです。私は、思ってもみなかった妻の反応に驚き、また、このご夫婦が気分を損ねないかも心配しました。

「なるほど、それも、ごもつとも。いやあ、余計なことを言いました。かえって失礼なことをしました。」

と、お二人は、笑っていらっしゃいました。その後は、私の娘に、まるで自分の孫に接するかのようにお話をしてくださいました。その横で、私一人が取り残されたように、だまって立っていました。

間もなく、前のご夫婦と私たちは、ほぼ同時に席に案内されました。席も、偶然、隣でした。

娘は、当時は食が細くて、外食しても料理を完食したことは一度もありませんでしたが、この日、初めてお子様ランチを残さずに全部食べてしまいました。

隣のご夫婦は、食事を済まされて、私たちより先に席を立ちました。お二人は、私たちに向かって深く頭を下げられてから店を出て行かれました。妻と娘は、手を振って二人を見送っていました。娘は、「おじいちゃん、おばあちゃん、バイバイ！」と、大きな声で言っていました。

私は、その様子をただ、横目で見ることしかできませんでした。

あの時、正直に話すことができなかったこと —鳩時計を壊したのは、本当はぼくです。—

私が通っていた幼稚園のろうかの大きな柱に、「鳩時計」が掛けてありました。1時間ごとに、その時刻になると、その時刻の数だけ鳴く「鳩時計」。幼稚園児の私には、不思議でたまりませんでした。本物の鳩ではないことは、幼稚園児ではありましたが分かっていました。不思議なのは、その時刻になると、巣箱から鳩の模型が飛び出して来て、しかも、その時刻の回数、間違わずに鳴くことだったのです。「どんな仕組みになっているのだろう？」と、鳩時計の中を見てみたい衝動に駆られました。でも、鳩時計が掛かっている場所は、とても高くて手が届きません。

というわけで、私は、よく鳩時計の近くでそれを見上げて観察していたのです。

ある日、私は、鳩時計から、チェーンがぶら下がっていることに気がきました。「きっと、このチェーンを1回引っ張れば、鳩は1回鳴いて、2回引っ張れば2回鳴いて・・・ということなんだ。園長先生が、こっそり引っ張っているんだ。」と、勝手に思い込んでしまいました。実は、園長先生がいなくても、鳩時計の鳩は勝手に鳴いていたこともすっかり忘れて、また、鳩時計に限らず、家にもあった柱時計は、その時刻の回数だけボンと音を鳴らす、鳩時計と大して変わらないシステムのことが当たり前にあることは、全く気にせず、とにかく、このチェーンと鳩には深い関係があると思い込んでしまったのです。

そういうわけで、私は、そのチェーンを握って、1回引っ張ってみました。ガリガリっと音はしましたが、何の変化もありませんでした。そこで、今度は思い切り、チェーンを引っ張ってみました。

ガシヤーン！柱から、鳩時計が落ちてしまって、大きな音を立てて壊れてしまったのです。その音を聞きつけて、園長先生と誰か、もう一人の先生が駆けつけてきました。

「どうしたん？けがはしてない？佳樹さんが落としたん？」

私の手には、チェーンがしっかり握られたままでしたので、誰がどう見ても、私がチェーンを引っ張って、鳩時計を落として壊してしまったことは明白です。しかし、言い逃れができない状態で、追い込まれてしまった私は、この後、とんでもないことを言ってしまったのです。

「〇〇ちゃんが、した。」

近くにいた〇〇ちゃんが目に入った私は、とんでもない嘘をついてしまったのです。

「うそやろ？〇〇ちゃんが、そんなことするわけないやん。本当は佳樹さんがしたんやろ？正直に言いなさい！」

私は、鳩時計を落として壊した罪と、それをかくすために、やってもない友達に罪をかぶせようとしたそれよりも何百倍も重い罪で、この後、園長先生たちに、こっぴどく叱られるはずでした。

ところが、その時、横にいた〇〇ちゃんが、

「わたしが、した。」

と、言ったのです。驚いたのは園長先生たちだけではありません。私が、誰よりも驚きました。『ぼくが落としたのに、〇〇ちゃんは、しとらんのに！何でそんなこと言うんやろ？』

「〇〇ちゃん、本当に〇〇ちゃんがしたん？」

と、園長先生たちは、とても優しく聞きました。〇〇ちゃんは、なぜか、

「わたしが、した。」

としか言いません。全くどういうことか分かりませんが、私と〇〇ちゃんの証言は一致してしまったわけで、園長先生たちも、まだ、私を十分疑っていないながら、もうそれ以上は追及せず、もちろん、〇〇ちゃんを叱ることもなしに、この一件は解決してしまいました。

それから45年は経ったでしょうか。私は同窓会で偶然会った「〇〇さん」に思い切ってあの時のことを謝りました。それまで、私は、あの時についたその罪を、ずっと背負っていました。もっと早く謝れば、謝ることもできたはずなのですが、45年間も経ってしまいました。

「えーっ、そんなことあったん？覚えとらんわ。それにしても真鍋君、ひどいなあ〜。悪人やなあ。私がしたと言ったん？それは、訳分からんと、勢いでそう言ったんやわ。」

と、〇〇さんは、笑い飛ばしてくれました。そして、クラスの仲間に、そのことを言いふらしてくれました。皆から、「ひどいやつだ！」と言われたおかげで、私は、この話を、皆さんにすることができました。

駅の生け花 — 美しい所に 人は決してゴミを投げ捨てない —



左の写真に写っているのは、JR高瀬駅の改札口を出た所にあるガラスのケースの中の「生け花」です。この生け花は、造花（作り物の花）ではありません。それなのに、年中、この写真のようにケースの中で美しく咲いています。365日、いつ見ても、とても美しいのです。

駅員さんが花を生けているのでしょうか？もし、駅員さんでないとしたら、誰が、いつこの花を生けているのでしょうか？

私は、3年間、高松へ電車通勤したことがあります。この花を毎日、毎日、見ながら、こんなことを考えていました。（今から10年以上前の事です。）

ある日。私は、いつものように電車で高瀬駅まで帰ってきました。ところが、高瀬駅に着く少し前に、急に大粒の雨が降り始め、駅に着くころには、バケツの水をひっくり返す程の豪雨になっていました。「天気予報では、雨は降らないと言っていたから、かさも持ってない。どうやって家まで帰ろうか。」と、困惑しながら改札口を出たところ、そこに妻と小学校3年生の娘が待っていました。

「お父さん。迎えに来てあげたで。優しいお母さんと私に感謝しなよ。」と、娘は言いましたが、娘は、私の背後にある「生け花」の方を見ていました。「きれいな花やなあ。駅員さんが、生けとんかなあ？」と娘。「なかなかええ所に気が付いたなあ。そうなんよ。この生け花、年中、このようにきれいなんよ。」と私。「で、誰が手入れしとん？」と娘。「それが、知らんのよ。でも、枯れた葉っぱ一枚も見ることがないで。」と私。「知らんのかい。」と娘。「そうや、明日は休みやから、一緒に駅に来て、駅員さんに聞いてみよう。」と私。実は、高瀬駅は、駅員さんが、朝から夕方までしかいない駅なのです。

というわけで、あまり乗り気のしない娘を連れて、翌日の朝、私は高瀬駅に向かいました。

娘が、駅員さんに「あの花は、誰が生けているのですか？」と、たずねたら、駅員さんは、「ああ、あの花ね。あれは、駅の近所の人がお世話してくださっていますよ。ちょうど、今、その方が、花壇の手入れをしていますよ。」と教えてくださいました。

私たちは、駅の駐車場の花壇の方へ行きました。そこには、一人のおばあさんが、暑い中、一生懸命に花壇の手入れをされていました。娘が「あのう、すいません。改札口のところの花は、おばあさんが生けているのですか？」と聞きますと、おばあさんは、「おじょうちゃん、気が付いてくれてありがとう。そうですよ。私たち、駅の近所の人ボランティアでしていますよ。」と教えてくださいました。

そして、なぜ、駅に花を生けるようになったのかについても、詳しく教えてくださいました。

今から30年くらい前、高瀬駅はとても汚れていました。花壇は、草がぼうぼうで、その周りに駅を利用する人が、たばこの吸いがらやゴミを平気で捨てていきました。電車を降りた高校生たちは、そのゴミを踏みつけて歩いていました。駅のホームも、階段も同じでした。ゴミだけを片付けても、すぐにゴミでいっぱいになってしまいます。このままでは、子どもたちの心が荒れてしまう、何とかしなくては。そう考えた駅の近所に住む私たちは、掃除をして花壇に花を植え、そして改札口のところに、生け花を置くことにしました。すると、花壇の周りにゴミを捨てる人は、ほとんどいなくなりました。そのうち、ホームや階段にもゴミはあまり見られなくなりました。それから、私たちは、交代で、ずっと駅の花壇や生け花のお世話をしているのです。大したことはできませんので、ちょっとしたことを続けているだけです。人は、美しい所に、決してゴミを捨てたりしませんから。

この話を聞いて、娘は「おばあちゃん、ありがとうございます。」と、大きな声で言いました。私も、とても大切なことを教えていただいたと、娘と一緒に深く頭を下げました。私が、学校の環境整備をするのは、実は、このおばあさんの言葉に深い感銘を受けたことがきっかけなのです。

実は、この話には続きがあります。この話を聞いたのが夏休み前のことでした。夏休みになって、私と娘は、再び高瀬駅を訪れることになります。その話は、次回の「真鍋校長の独り言」でご紹介します。